

東京第18派遣所（横浜耐火煉瓦）

笹本妙子

この収容所は横浜の煉瓦工場内に1944年5月から1945年6月まで開設されていたが、空襲が激しくなると閉鎖され、捕虜は他の収容所に移送された。

■ 所在地と歴史

この収容所は、1944年5月1日、東京俘虜収容所第18派遣所として、横浜市磯子区西根岸馬場町8番地の（株）横浜耐火煉瓦の敷地内に開設された。中村橋と八幡橋を結ぶ堀割川に面し、現在、神奈川日産の販売店などがある辺りである。

捕虜たちは最初（1942年10月末～44年4月末）、横浜球場内に設置された東京第3分所からこの工場に通っていたが、同分所の閉鎖に伴ってこの派遣所が開設され、約80人の捕虜（主にアメリカ兵とイギリス兵）が収容された。

1945年5月29日の横浜大空襲では大きな被害はなかったが、横浜が危険地域となったため、収容所は6月4日に閉鎖され、捕虜のうち81人は新潟市の東京第5分所へ、5人が東京本所（大森）に移送された。

■ 居住施設

収容所は捕虜宿舎、事務所棟など5棟の建物で構成され、周囲は上部にバラ線が張られた3メートルほどの塀で囲まれていた。捕虜宿舎は2階建てで、3メートル×6メートルほどの小部屋に分かれていた。

■ 職員

初代の派遣所長は林純勝中尉（44年5月1日～12月20日）、2代目が金網竜吾中尉（44年12月21日～45年6月4日）であったが、両者とも他の分所、派遣所の所長を兼任していたため、実質的な管理は副所長の飯田ヒロシ曹長（44年5月1日～12月30日）と牛島甲彦軍曹（45年1月1日～5月）が担っていた。他に、軍属2人、会社差し出しの監視員5人と通訳1人が勤務していた。

■ 労働

捕虜たちは煉瓦の製造作業に従事した。煉瓦は主に船のボイラー用であった。根岸の山に木を伐採に行くこともあり、その姿が近隣の人々に目撃されている。労働時間は朝8時から夕方5時まで。賃金は1日20銭で、会社が軍にお金を渡し、軍が捕虜に支払った。

■ 食糧

米と生活必需品は軍から支給され、監視員と捕虜2、3人が横浜球場内の第3分所までトラックで受け取りに行った。トラック輸送中に、捕虜たちが俵の中から少量の米を荷扱

きすることもあった。

戦況悪化と共に食糧事情も悪化し、会社側は闇物資を購入するなど食糧調達に苦勞した。そこで、曹長の提案で、捕虜たちは工場敷地内で野菜作りをするようになった。

■ 医療

アメリカ人医師のケリー中尉が医療を担当し、工場の外科医オジマ医師がこれを補佐した。病気は気管支炎、風邪などが主で、この収容所からは死者は出ていない。

■ 懲罰

日本人の畑からカボチャを盗んだり、夜間にタバコを吸うなどの規則違反を犯した捕虜が職員に殴られるという事件がいくつかあった。クイーン少佐は宣誓書の署名を拒否したため殴られた。しかし、他の収容所に比べると、概して過酷な虐待は少なかったようである。

■ 日々の生活

収容所が会社に依頼して、ギターやバイオリンなどの楽器を購入して貰い、捕虜たちは自由時間に演奏して楽しんだ。44年のクリスマスには演芸会を催し、仮装行列も登場して大いに盛り上がった。

通訳の大沢猛氏は、戦前アメリカで15年ほど暮らした後帰国し、武相中学の英語教師をしていたが、第18派遣所の開設と同時に通訳



として雇われた。息子の大沢秀人 44年のクリスマス。前列の日本人が飯田曹長。大沢秀人氏提供氏によれば、大沢通訳は配給のタバコが手に入ると捕虜たちにそっと分け与えたりしていたが、飯田曹長はいつもそれを見て見ぬふりをしてくれたという。アメリカ人元捕虜の Winston Shilito 氏は「大沢は日本語が流暢でなかったため、他の日本人職員とはあまり馴染まず、できるだけ我々と一緒に居たがった。彼は通訳であると同時に、我々の友人でもあった」と語っている。

■ 空襲

45年に入り、空襲が激しくなってくると、捕虜たちは連合軍の勝利を口にするようになり、日本人の反論もものともせず、勝利を固く信じていた。

収容所敷地内に大小3つの防空壕があり、45年5月29日の横浜大空襲の時にはここ

に避難したが、爆弾投下が激烈になったため、外に出て工場内の安全地帯に避難した。事務所棟が焼けたが、被害者はなかった。

一方、中区山下町にあった第19派遣所はこの空襲で焼失し、その捕虜たちが第18派遣所に避難してきて、6月4日の閉鎖まで仮住まいした。

■ 戦犯

2代目所長の金網竜吾中尉は、捕虜を危険な作業に従事させたこと、部下の捕虜虐待を許容したこと、赤十字品を横領したことなどの罪で重労働9年、門野淳二軍曹は捕虜虐待の罪で重労働6年の判決を受けたが、それぞれ7年11ヶ月、4年10ヶ月に減刑された。飯田曹長も最初、戦犯容疑者として逮捕されたが、大沢通訳が前出の写真や元捕虜たち証言を集め、彼の嫌疑を晴らすために奔走した結果、無罪放免となった。元職員・石川林之助氏の手記によれば、元捕虜将校の1人ローズ氏がマッカーサーに宛てた手紙には「彼はまれにみる好曹長であった。もし裁判の結果、彼が有罪となったら、それは正当なる裁判とは認めがたい」と書かれていたという。

■ 戦後

戦後まもなく、何人かの捕虜が煉瓦工場を訪れ、世話になったお礼としてタバコやチョコレートなどを置いていったという。

参考文献

- ・ GHQ/SCAP 法務局調査課報告書74号
- ・ 『大日本帝国内地俘虜収容所』茶園義男編著／不二出版／1985年
- ・ 『BC 級戦犯横浜裁判資料』茶園義男編著／不二出版／1986年
- ・ 『京浜地区の捕虜収容所・中間報告書』笹本妙子著／アート出版／1999年
- ・ POW 研究会ホームページ
- ・ 石川林之助「横浜陸軍第19派遣所」（『横浜の空襲と戦災 I 体験記編』掲載）
（タイトルの“第19派遣所”は石川氏の誤記で、記述内容は第18派遣所に関する
ことである）
- ・ 大沢秀人氏証言
- ・ 森孝氏証言
- ・ Winston Shilito 氏証言